

東海能楽研究会 年報

『副言卷』は上演されたのか？

橋場 夕佳

『副言卷』は、十五代観世大夫元章（享保七年「一七二二」～安永三年「一七七四」）が中心となつて、明和二年（一七六五）六月に刊行された謡本（所謂「明和改正謡本」）に伴い、「明和の改正」の一環として新たに制定された間狂言台本（ワキのセリフなども含む）である。『副言卷』は、明和本同様、田安家における学問研究の成果を反映した考証的側面を持つ一方で、間ノ段が能の前場と後場をつなぐ場面として機能することをより意識した構成もその特徴であると言える。

ここで取り上げたいのは、この『副言卷』に沿って実際に上演されたか否かという問題である。同問題について、表章氏は以下のように述べている（注1）。すなわち、「座としてのまとまりよりは各役の流儀の主張が優先していたと考えられる当時の能界の状況」や、同書の流布の狭さから推定される「明和本廃止の直前の刊行だった可能性」の高さに鑑みて、『副言卷』に

よつて「実演された可能性は極めて低い」と結論づけておられるのである。結論から言うくと、筆者は『副言卷』による上演の可能性はあると考えている。

まず取り上げたいのは、次の賀茂真淵書簡（注2）（植田七三郎宛「明和五年」）である。

一、謡の文句改候事は、拙者かまはず候。…（中略）…かゝる俗事はとてもかくても有べき物也。狂言人のいふかたりなどはよくなかりしを、よほどよく成候也。惣ての舞かけりなどの所々も多くなほりし也。高砂は八段の舞に成たり。ふるくは八段有しといへり。

右の書簡の「狂言人のいふかたり」はアイ語りのことを指していると考えられ、その後に「惣ての舞かけりなどの所々も多くなほりし也」などと実際の演能に接した感想が続くことから、『副言卷』の詞章によつて上演されたアイ語りが従来のアイ語りよりもよくなったことを述べているとも解し得るだろう。表氏が指摘するように、『副言卷』の流布の狭さは、明和本廃止直前の刊行を示す事象であるにせよ、少なくとも明和五年の時点で、新たなアイのセリフの制定とそれによる上演の

試みが成されていた可能性は否定できないのではないだろうか（注3）。

また、観世文庫蔵「雲林院間鉢鳴」（注4）の内容も、『副言卷』に沿つた上演が成されていたとの推論を補強し得る資料ではないだろうか。『雲林院間鉢鳴』は『副言卷』第十一（観世文庫・鴻山文庫蔵）所収の（雲林院）の替間「鉢鳴」と同文であるが、舞台上の動きを指示する「型付」や囃子事について注記し、末尾に装束附を付す。型付中に小鼓を「肩鼓」と表記することや末尾の装束附の「俳袴」といった用字から、注記された型付及び末尾に付された装束附は元章自身によるものか、もしくは、元章による演出の影響を受けた内容であると考えられる。『副言卷』の本文が演出に関する注記を持つことが、即時に『副言卷』が上演台本として使われていたことの証明にはならないが、上演を前提とした具体的な演出記事の存在は、『副言卷』による上演の可能性を高めるものとして捉えることができよう。

用いられたのか、あるいは、例えば田安家における演能など、限定的な場におけるのみ用いられたものであったのかなど、検討すべき問題は残されている。

（注1）表章「能楽研究講義録」（笠間書院。平成22年）に拠る。

（注2）久松潜一・監修「賀茂真淵全集」第二十三卷（続群書類完成会。平成4年）

（注3）平成23年3月6麓会例会報告において、賀茂真淵書簡の当該部分を「副言卷」上演の根拠とはなし得ないとのご指摘を頂戴した。それを踏まえ、今後同資料の扱いについては再検討していきたい。

（注4）資料の閲覧は「観世アーカイブ」(<http://gazo.dic.u-tokyo.ac.jp/kamzegazo/gaiyohiml>)に拠った。

川崎千虎と明治初期の能

佐藤 和道

演劇博物館安田文庫に所蔵される「宝生流作り物之記」（一、二、四一）及び、「明治初年頃京名古屋等諸家能番組」（一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇）は、名古屋出身の絵師川崎千虎の編と伝えられる。前者は、宝生流九十曲の作り物を図入りで記したものであり、

後者は明治初年頃とみられる名古屋・京都の能番組百点余を貼り交ぜたものである。千虎は、故実家・日本画家として著名な人物であるが、能との関係については不明な点が多かった。そこで本稿では、両者の接点について考察を試みたい。

『国史大辞典』（吉川弘文館・一九八三年）によると、千虎は天保七年（一八三六）十二月二日に尾張藩士川崎六之丞の子として生まれ（通称源六・頼太郎）、四条派の沼田月齋に画を学んだ後、京都に出て土佐光文（土佐本家、絵所預）門下となつて禁裏仙洞御所御用をつとめた。さらに明治十一年に上京して大蔵省商務局に奉職、明治十五年の第一回国絵画共進会に出品した「佐々木高綱被甲図」にて、歴史故実画家としての評価を高め、後に東京美術学校教授等を歴任したとされる。その出自については、『藩士名寄』（徳川林政史研究所蔵）に詳しい。

川崎源六

五十俵

三十俵

文久三亥七月八日 頼太郎

慶応二寅四月十二日 六歳

慶応三卯八月十一日 頼太郎

一 安政七申三月八日 御目見

より六之丞儀願之通隠居被

仰付家督御切米無相違被下置

小普請組被 仰付。

一 文久二戌十一月廿日出格之思召を以世禄高五十俵二御加増被成候

一 同三亥八月十五日大御番組被 仰付

一 元治元子七月五日願之通大御番組御免馬廻組 被仰付

一 同年九月十二日別手形可相勤候

一 同二丑二月廿五日大御番組被 仰付

一 慶応二寅十月廿九日別手形大御番組被 仰付

一 明治二巳正月十八日神祇参知補申付候様二与之御事候

一 同日神社改訂御用聞引請可取扱旨

一 同年十二月十九日職制御改二付職務御免被遊候

一方『古今中京画談』（田部井竹香著・一九一一年）は父の六之丞（六之とも）について以下のように記している。

六之頗る多能にして、猪谷流の劍術、新心院の居相、転心流の組討等の奥秘を極め、又同藩五味藤六に随ひ、武家の故実を伝ふ、而して其の遊芸に至りては、宝生流の謡曲を好み、千家の茶道を嗜み、浮世絵を沼田月齋に学ぶ、月齋二代哥政と称ふるを以て一字を分与せられて、美政と称す、其の画敢て妙手といふにあらざれども亦以

て其の筆法の師伝あるを観るに足るべし。

これによると父六之は浮世絵のほか宝生流の謡曲を嗜んでいたらしく、千虎がその影響を受け、絵画や能に親しんでいた可能性は高い。『宝生流作り物之記』が奥書から安政四年（一八五七）の著作であることを考えれば、家督相続以前のかなり早い段階から能や絵に習熟していたようである。

一方、『明治初年頃京名古屋等諸家能番組』には、千虎が関わったと思しき明治十年以前の能番組が多数見えており、この時期にかなり熱心に能と関わりを持っていたことが窺える。同書掲載の番組を以下に掲げる（近接する番組は纏めて記した）。

- (1) 明治四年二月廿八日・三月初日大野（藤五郎）能組
- (2) 十月十七日・十一月三日野村（三次郎）能組
- (3) 十一月十一・十二日竹内（達三郎）能組
- (4) 十一月十六日（片山九郎三郎か）能組
- (5) 十一月廿日野村能組
- (6) 五月廿七日野村稽古能組
- (7) 八月九・十日野村能組
- (8) 八月廿二・廿四日片山能・囃子組
- (9) 八月廿七日竹内能組
- (10) 九月十一日野村能組
- (11) 九月十三日片山能組（中野小三郎職分披露）
- (12) 九月廿日野村能組（先代寺田左門治追善）
- (13) 九月廿三日（片山一改名披露）
- (14) 十月三日片山能組（山本市太郎先代追善）
- (15) 十月五日三十三間堂芝奉納能組
- (16) 十月七日野村能組
- (17) 十月九日片山能組
- (18) 十月十一日正阿弥追善狂言組
- (19) 十月十五・十六日今宮御旅所奉納能組
- (20) 十月廿一・廿三日片山能組
- (21) 十一月十一・十二日竹内能・囃子組
- (22) 二月廿三日（野村か）能組
- (23) （明治元か）閏四月廿一・廿六日片山能・囃子組
- (24) 五月廿一日野村能組
- (25) 明治四年三月廿一・廿二日大野能組
- (26) 明治四年四月廿一日・廿二日大野能組（二七・二九に延期か）
- (27) 明治四年五月六日・七日大野能組
- (28) 明治四年五月十一・十二日早川能・狂言組
- (29) 明治四年八月廿・廿一日早川能組
- (30) 九月廿三日於神明社能組

- 能(高砂) シテ土屋喜一郎ツレ
- 渥美銀四郎 ワキ杉山可也・鈴木勘三郎・小嶋常次郎備楚見田新六郎・小安井八郎大鷲見庄太郎太飯尾蘇平間木村喜太郎
- 能(八島) シテ田中弥太郎ツレ喜一郎ワキ上原光雄備佐藤善六郎小関竹三郎大島田伝八郎間那須本多孫三
- 能(熊野) シテ渥美銀四郎ツレ喜一郎ワキ鈴木九兵衛・常次郎備善六郎小石田縫五郎大庄太郎能(鶴) シテ土屋喜一郎ワキ杉山可也備新六郎小大河春三郎大伝八郎太金山弥市間夏目半平能(葵上祥之出) シテ窪一郎ツレ銀四郎ワキ鈴木九兵衛・可也備新六郎小藤井徳三郎大庄太郎太蘇平間本多孫三
- 能(狸々) シテ伊達高三ワキ鈴木勘三郎備新六郎小水野直六大伝八郎太蘇平
- 昆布売 夏目半平
- 鐘の音 本多孫三
- 井杭 木村源治
- 貫鞆 木村喜太郎
- (31) 明治五年八月十三日三州新城 神事能組
- (32) 明治五年八月十七・十八・廿・廿一・廿二日早川能組
- (33) 八月廿一・廿二・廿三日室町野村宅能組
- (34) 明治四年九月朔日・二日岡崎

- 随念寺能組
- (35) 明治四年從十月五日三日之間 早川能組
- (36) 明治四年十月十三日早川能組
- (37) 霜月早川囃子狂言組
- (38) 明治五年十一月二十一・廿二・廿六日大野能組
- (39) 明治六年二月十六日野村囃子組
- (40) 明治六年三月十・十一日・十二日・二十日・二十一日・廿二日大野追善能組
- (41) 明治七年三月十六・十七日早川能・狂言組
- (42) 明治六年四月二十一・廿六・五月一日大野能組
- (43) 明治七年十一月六・七・八日 早川能狂言囃子組
- (44) (明治十年?) 十月十九日大野能組
- (45) 明治四年十月朔日・二日早川能・狂言組
- (46) (明治五年) 二月朔日・二日 九条家奥舞台能組
- (47) 二月十日・十一日九条家奥舞台能組
- (48) (明治五年) 四月西京博覧會 興行安井社内能組十四番
- (49) 明治五年四月廿六・廿七日大野能組
- (50) 明治五年五月朔日・二日大野能組
- (51) 明治五年六月七日・八日安海

熊野神社祭礼能
右のうち東海地方における演能は、『近代名古屋の能楽を支えた人々』(寛鈷一・飯塚恵理人編・二〇〇一年)によつて上演年が判明する(なお(30)は東海地方での演能(安海熊野神社か)と思われるが、同書未掲載のため詳細を載せた)。中でも明治四年の大野藤五郎関係の番組には、出演者の中に千虎の名が見えている。(25) 三月二十一日 能(野守) シテ川崎千虎ワキ安藤清之助備森藤八小坂卷市右衛門大木理三郎太松田斧助

(25) 三月二十二日 能(志賀) シテ内田雨耕ツレ川崎千虎ワキ加藤十郎備藤田理三郎小加納富三郎大島田釜太郎太勅使河原為三郎間磯部三段治

(28) 五月十一日 舞囃子(野宮) シテ鞆千虎備藤田理三郎小服部宗三郎 大渡会太飯田林右衛門

また『近代名古屋の能楽を支えた人々』には、さらに二つの出演履歴が確認できる。

○明治四年六月十一日 大野藤五郎宅打田雨耕望月仕直し袴能 舞囃子(巻絹) シテ川崎鞆太郎

一調(須磨源氏) 小加納富三郎 謡

石原欣之丞・川崎鞆太郎 仕舞 曲名不記 シテ川崎鞆太郎

○明治四年一〇月二日 早川舞台 山脇伊津美催能 能(舍利) シテ鞆千虎ワキ西村大藏 備山本【金に朔】次郎小鈴木達藏大立

花一枝大鬼頭為三郎 (鶴舞図書館蔵『片岡喜平治覚帳日記』)に拠る。なお右の一調・仕舞については、原本には「加納富三郎一調 地兩人/須磨源氏 石原欣之丞/仕舞 川崎鞆太郎」と記され、実際には千虎が一調と仕舞のどちらに出演したのか判然としない。また(36) 大野藤五郎(蟬丸)のツレ中川六太郎には「川崎千虎歎」との注記がある。

千虎が出演している番組は、いずれも宝生流の抱役者、大野藤五郎に關連するものであることから、千虎は大野の弟子であった可能性が高い。一方、京都での演能は觀世流の片山・金剛流の野村・喜多流の竹内ら禁裏御用役者の演能である。恐らく千虎自身が披見したものと思われるが、師の土佐光文に会うために頻繁に京都を訪れていたのではなからうか。以上のことから千虎は、父の影響から若年期より宝生流の謡曲に親しみ、明治期にはシテやツレを演じるほどに熟達していたことが分かる。そうした能への造詣から、『宝生流作り物之記』や『明治初年頃京名古屋等諸家能番組』等を残すに至つたのであろう。なお、演劇博物館蔵『故実式三番手数』(×10-143)も千虎の編であるが、同書は能とは無関係の書であるため、本稿では扱わなかつた。

世襲面打家の居所(その二)

保田 紹雲

出目元休家

元休家は出目本家を標榜しているが幕府から拝領屋敷、御扶持は与えられていない。

元禄九年(一六九六)から『江戸幕府役職武鑑編年集成』(以下、『武鑑』と呼ぶ)には御用聞町人の項に御面打師が掲載されるようになったが、宝暦九年(一七五九)までの間は大野出目家と元利家が掲載されていて、元休家の掲載が始まるのは宝暦十年(一七六〇)まで待たねばならない。

元利家が「出目の本家争い」(注1)の幕府の裁定で、出目の本家とされ、元休家は末家とされていたためである。

元休家がこれに掲載されるようになったのは、元利家が三代右満で消滅し、元休家が再び幕府御用を勤めるようになったのであろう。

しかし、明和九年(一七七二)から天明七年(一七八七)の間は大野出目家のみ記載で元休家の記載が途切れている。

この理由はわからないが、天明八年(一七八八)からは再び掲載されて幕末まで続いている。

『武鑑』記載の居所

元休家の居所について『武鑑』には次のようにある。

宝暦十年(一七六〇) 明和八年(一七七二) 弥左衛門町

明和九年(一七七二) 天明七年(一七八七)

(大野出目のみで元休家の記載はない)

天明八年(一七八八) 文化十二年(一八一五)

京橋銀座四丁目 文化十三年(一八一六) 幕末まで

八丁堀坂本町二丁目はいずれも銀座の周辺である。

安證寺蔵出目満光書状の居所

安證寺(福井県越前市妙法寺町一四一四一)に出目満光からの書状(注2)が残されている。

寺伝によればこの寺は三光坊の弟の千秋伊予守頼吉が天台宗の寺を真宗に宗旨替えして開基した寺とあり、また、満守著『仮面譜』(注3)には源次郎満吉の項に「越前府中妙法寺村西本願寺流安祥寺を開基す」とあって開基が何時であるかは検討を要するが、いずれにしても越前出目家とは深い関係の有する寺である。

満光の書状には居所として「御出府中御宿申候浅草居宅も十ヶ年已前殊之外近火二而類焼仕」、「江戸深川小名木通上大嶋村と申處ニ罷居候」とある。

火事で焼けた浅草居宅には越前から安證寺の住職が出府した際に宿泊しているが、詳細な場所はこの記述からは不明である。

江戸深川小名木通上大嶋村は『切絵図』で見ると小名木川と横十間川の交わった北側で現在の猿江恩賜公園の南あたりである。

この手紙には出された日付が「七月十八日」とあるが差出年は記されていない。

満光書簡の記述内容と元休家の墓所の正源寺(東京都港区高輪二丁目一四四五)の過去帳から書簡の時期を推定すると、天保年間末から弘化年間の頃と思われる。

正源寺過去帳の居所

正源寺の過去帳には次のように記されている。

享保四己亥年(一七一九) 三月二十五日

積玄休 出目元休(満茂) 北八丁堀

天保十二辛丑年(一八四一) 六月十三日 積妙敬 出目仲(満光)

娘□□ん 四才 本所

天保十三壬寅年(一八四二) 四月二十二日 積妙曜 出目元休

(満光)妻 本所

安政元甲寅年(一八五四) 七月十二日 積元休 出目元休(満光) 本所

『能楽盛衰記』の居所

正源寺過去帳にある本所の詳細な場所は判らないが『能楽盛衰記・江戸の能』(注4)には「満永から江戸本所五ッ目に住んだので、其の族を五ッ目出目とも呼んだ。」とある。

『切絵図』の本所絵図では五ッ目通は亀戸天神の東側であり、元休家の住んだ本所五ッ目は総武線亀戸駅の西あたりになるのではなからうか。

本所五ッ目と正源寺過去帳にある本所が同一場所である可能性もある。

観世清之談の居所

幕末の観世清之(観世喜之家初代)談・山本松之助聞書『能楽叢話』の「面打実見の事」(注5)によれば、「御沙汰によって邯鄲男の古作を去年没した元休の前の元休が写すことになりました」「元休は木挽町に邸があった」「観世の邸は元京橋弓町の俗に観世新道に在った」「面の古作写しは細工中太夫の邸へ面打が毎日通って来て細工をするので座敷の内を清め屏風を立廻し香を燻き清めた」とある。

「去年没した元休」はこの著述の時期や清之の没年から明治四十二年頃と推定出来るので、「その前の元休」は明治二十年没の源助満守である。

これと同じ内容の聞書は観世清之氏談「能の面」(注6)にも掲載されている。

木挽町は三十間堀川を挟んで観世屋敷や金春屋敷のあった銀座の向かい側の堀に沿った町家であり、現在、三十間堀川は埋め立てられて昭和通りとなっており、昭和通りにそった南東側である。

この観世喜之聞書を正しいとすれば、毎日観世屋敷へ通うには木挽町に住んでいる方が便利である。

『江戸鹿子』の居所

『いわき資料集成』第四冊(注7)にある貞享4年刊の『江戸鹿子』巻六(注8)に「面打／尾張町式丁目出目洞伯／同所 出目奎之助／日比谷一丁目 出目源助」とある。出目源助は出目満茂である。尾張町式丁目は銀座中心部、日比谷一丁目は確認出来ないが、日比谷御門の近くと思われ、銀座の至近であろう。

元利家

『武鑑』の御用聞町人の項に御面打師として元禄九年(一六九六)から宝暦九年までの間は大野出目家と元利家が掲載されている。

これは元利家が「出目の本家争い」

(注9)での幕府の裁定で、出目の本家とされ、元利家は末家とされていたためであろうが、元利家が三代右満で消滅したためか、宝暦十年以降は元利家になっている。

『武鑑』記載の元利家の居所は

元禄九年(一六八六)～宝永四年

(一七〇七)

霊岸島長崎町

宝永五年(一七〇八)～宝暦九年

(一七五九)

本町三丁目

霊岸島長崎町は東京都中央区新川一丁目あたりである。

本町三丁目の場所は日本橋の北、江戸通り交差点付近で新日本橋駅の東あたりであろうか。

『武鑑』に記された元利家の場所より元利家の方が銀座からの距離は少し遠い。

栄満は宝永二年(一七〇五)歿。寿満の作が栄満より格段に劣る理由の一つに手本面や当型などの能面制作資料を失っていることが想像され、『武鑑』で宝永五年(一七〇八)から居所が変わっていることを考え併せると、火災によって栄満が残した制作資料が失われたことが考えられるのではなからうか。

なお、元利家二代壽満、三代右満の生没年は古能『仮面譜』その他にも不詳とされているが、右満の書いた白色翁・日光作の鑑定書(注10)に

は寛保二壬戌(一七四二)暮春己巳日の日付があり、この時点で壽満はすでに没していた可能性が高く、右満は『武鑑』記載がなくなった宝暦十年(一七六〇)には没していたと推定する。

まとめ

以上、各種資料から拾って居所を列挙したが、大別して銀座周辺の場所と銀座から直線距離で5km以上離れていて当時は江戸の市街のはずれの場所と二分される。銀座周辺は懇客にとって能面の購入や修理の注文に都合が良い場所であろう。

一方、はずれの場所は家族の住居のみであったか？細工を行う工房はどちらに在ったか？疑問が残る。

面打家が代を重ねるに従い作品の質の低下する原因の一つに、火事による転居の可能性が考えられ、火事の際に能面制作に必要な資料が守れなかった為があるのではなからうか。

江戸時代の面打家の居所は彼らの生活が如何なるものであったかを考える一資料となるであろう。

また、ここに記した面打の居所以外にもまだ多くの資料が眠っていることと思われまます。ご存じあればご教示をお願いします。

(注1) 「出目の本家争い」(拙稿「出目満直及び元利家伝書について」『名古屋芸能文化』第十八号・平成二十年十二月二十一日刊)

(注2) 満光の書状(飯塚恵理人著「越前出目家墓参記」(椋山女学園大学「文化情報学部紀要」第九巻第一号二〇〇九年度刊)

(注3) 満守著『仮面譜』(国立国会図書館蔵「仮面譜と奈良人形」所蔵番号八四一―一四六の内)

(注4) 『能楽盛衰記・江戸の能』(池内信嘉著「能楽盛衰記・江戸の能」大正十四年十一月十五日能楽会発行三一―五頁)

(注5) 観世清之(観世喜之家初代)談・山本松之助聞書『能楽叢話』の「面打実見の事」(山本松之助著「謡曲座右抄」の内)(明治四十三年十二月二十五日江島伊兵衛発行)

(注6) 観世清之氏談「能の面」(『能楽』第三巻十一号 明治三十六年十一月十日発行)

(注7) 『いわき資料集成』第四冊(平成二一年一月二六日いわき史料集成刊行会三二九頁)

(注8) 『江戸鹿子』巻六(貞享四年 藤田利兵衛著 東京・静嘉堂刊)

(注9) 拙稿「出目満直及び元利家伝書について」『名古屋芸能文化』第一八号平成二十年十二月二二日刊

(注10) 『能面』中西通著一九八五年四月一日玉川大学出版部刊三一頁写真

能「清経」の修羅

三苦 佳子

能「清経」は、平家が都落ちしてわずかに二ヶ月余りで入水して果てたと伝わる平清経を描いた作品である。作者の世阿弥は源平の武将達を「軍体の能姿」と呼ぶが、彼らの登場する能は今日では修羅能と分類される。戦闘に関わった者は死後に成仏できず闘争の絶えない地獄、修羅道に落ちると考えられていたからだ。

しかし、清経の場合はすでに成仏した人物として登場する。このことは能の結末の言葉「まことは最後の十念乱れぬみ法の舟に 頼みしままに疑いもなく げにも心は清経が 仏果を得しこそありがたけれ」で明らかになる。実は死の直前に念仏を唱えたおかげで心が清らかに澄んで成仏できたと清経が感謝して終わる。では、成仏を願う必要のない清経は何のために舞台上に登場したのか。

『源平盛衰記』には、清経から生前に贈られた形見を妻が送り返すという逸話が載るが、能は清経の死の後日談となっている。清経の妻は、戦う前に自ら命を絶った夫のふがいなさを恨むと同時に、悲しい現実を直視できずに夫の遺髪を送り返すという歌を詠む。世阿弥はこうした状況を脚色して、成仏した清経が現世に戻る動機づけとした。

この時の清経の心境は、妻の夢枕に現れた時の独白(サシ謡)「聖人に夢なし 誰あって現と見る」に示されている。雑念に惑わされない聖人は心に迷いが無いから夢を見ない、という聖人の心持ちで現れた清経は、この世をうつつとみるのは誰かと問いかける。さらに「げにや 憂しと見し世も幻 辛しと思ふ身も夢 いずれ跡ある雲水の 行くも帰るも閻浮の古郷に たどる心のはかなさよ」と独白は続く。世の中の憂きことは幻でありそれを辛いと思う自分も夢のような存在でしかない。この世のすべては形を持たないはかない現象に過ぎないのに、人はみな現(うつつ)を確かなものだと勘違いして生きている。このように清経は人生を達観し煩惱を離れた境地にあったが、愛しい妻がかりで安楽な世界に留まっていられず、閻浮(現世)に引き寄せられてしまったのだ。

「清経」の場合、清経(シテ)に対して実質的な脇役は妻(ツレ)である。妻は心情的には清経と対立するが、上演中は脇座に座って動かさない。なぜ武将である清経が自ら命を絶ったのか。これを理解できない妻は、同様の疑問を持つ観客の代表ともいえる。また妻は、夫の死を恨み我が身を悲観して心が乱れた状況にある。この妻の言動に反応して清経が何らかの行動をとっていくことで劇は進展していく。

作品は(起承転結)の構成に調え

られている。家来の粟津の三郎(ワキ)から清経の死が伝えられ、嘆き悲しむ妻の心を謡う地謡の(上歌(初同))までが導入の場面(起)。

(承)は清経の形見を妻が送り返すところから始まり、清経の登場の場面に繋がる。自分を残して死んでしまった夫を恨む妻と、心を込めて贈った形見を返した妻を恨む清経が互いに非難し合う会話の場面。続く地謡の(上歌)で、相手を思っているのに心がすれ違ってしまふ夫婦の葛藤を謡って場面は一段落する。

次に、清経が妻の恨みを晴らそうとして源平の合戦を語るところから(転)の場面となる。途中から(クセ)と呼ばれる謡に変わって所作を変えた舞の場面となり、清経が平家の前途を見極め入水を決意して海の水屑となるまでのいきさつが、清経自身の演技によって再現される。清経の心の動きに焦点を当てて彼の死に様すなわち生き様が描かれており、作品の中で最も観客に感銘を与える場面となっている。

そして最後の(結)では、清経が修羅道の話に妻に聞かせることになる。演出上は他の修羅能と同じように地謡の力強い謡に合わせて所作を伴った俊敏な演技が披露されて、能は締め括られる。しかし作品の主題が明確にされるべき結末の場面で、成仏したはずの清経がなぜ修羅道の世界を現すのだろうか。

清経はその理由を、いつまでも自

分の哀れな境遇を恨み嘆き悲しんでいる妻に向けて「いふならく 奈落もおなじ泡沫(うたかた)の 哀れは誰も変わらざりけり」と言う。一旦は修羅道に落ちた清経がそこで見たものは、この世(泡沫)と同じ有様だった。修羅道(奈落)では「立つ木は敵 雨は矢さき 月は清剣山は鉄城」とあらゆる存在が敵意に満ちていた。「驕慢の剣をそろえて邪見の眼の光」とは、傲慢な心が剣となり、眼に邪な悪意を光らせて傷つけ合うこと。「愛欲 貪痴」とは愛欲、貪欲、恨み、愚痴、さらに「無明も法性も 乱るる敵」と、迷いと悟りも絡まり合って、我欲にまみれ自分だけが勝ち残るために闘いを続ける亡者達。ここに映し出されているのは正にこの世の修羅の巷である。だからこそ人間は誰もが哀れなのだ。清経は妻を論じたのだ。

平家一門に生まれた清経は、この世の勝利から見放され死を逃れるすべのない絶望的な状況に直面し、現世の価値観では現実逃避ともいえる自殺によって死んだ。しかし死の時に、この世のすべてが無常、すなわち常無き状態に変化し続けている現象であることを悟り、同時に仏道の示す常住の世界を希求した。世阿弥は清経をこのような人物として描き出したのだと思われる。そして実に逆説的な方法で、すなわち死者の側からこの世で迷い苦しむ生者に対して、現実世界がそもそも夢や幻のよ

うに儂く不確なものだという事実を伝えようとしたのではないか。

〔清経〕の本文は金春流謡本を参考にして一部を改めて引用した。

〔資料紹介〕

佐藤友彦師所蔵

『高安流狂言応答』

飯塚恵理人

和泉流狂言方佐藤友彦師は、尾張藩御役者ワキ方西村敬元が明和元(一七六四)年に「邦高雅士」に与えた、ワキ方が間狂言と応答する際の詞章に関する伝書を所蔵されている。奥書を挙げると、「右高安流廻賦□□ 御懇望御調進句講 傳写之相違相見不申候弥御秘藏被可候明和元(一七六四) 甲申冬 敬元在判 邦高雅士」となる。擦れにより判読不可能な箇所があるものの、邦高雅士なる人物が高安流の廻賦を借りて写し、敬元が高安流の本文と相違がないと奥書に記したものが元となる本である。(この本はおそらく敬元所蔵の元本を写したものであるう。) 敬元の花押がなく「在判」とあることから、この本の奥書は元の本にあったものを筆写したものである。西村敬元は、『名古屋市平和公園墓地名家録』(山田秋衛 市橋鐸 編集 名古屋市戦災復興興墓地整理委

員会 昭和三十一年四月発行 一四六頁)によれば三代目の西村庄兵衛(尾張藩御役者 ワキ方)で、寛政七(一七九五)年二月六日、七三歳で亡くなっている。墓所は同書に「西区橋詰町円頓寺(日蓮宗)」、戒名は「敬元院宗信日行」とある。さらに敬元の事績として「明和八年後桜町天皇即位の能に召されて、開口、張良を演じた(中略)又家伝の法を纏めて一部の定本をつくつた」と載り、本書も敬元の家伝の纏めに連なる書と考えてよいだろう。この本には表紙に『廻賦』とあるのみで書名がないので仮に『高安流狂言応答』とつけさせていただいた。目次に従って曲名を挙げる。(本文では『錦木』と『葛城』の順が逆となっている。)

- (一) 《高砂》(二) 《弓八幡》
- (三) 《老松》(四) 《竹生嶋》
- (五) 《氷室》(六) 《田村》
- (七) 《八嶋》(八) 《忠度》
- (九) 《兼平》(十) 《実盛》
- (十一) 《東北》(十二) 《芭蕉》(十三) 《野々宮》(十四) 《松風》(十五) 《楊貴妃》(十六) 《百萬》(十七) 《三井寺》(十八) 《富士太鼓》(十九) 《花月》(二十) 《東岸居士》(二十一) 《黒塚》(二十二) 《葵上》(二十三) 《舟弁慶》(二十四) 《融》(二十五) 《泉郎》(飯塚注) 《泉郎》は《海士》の異表記(二十六) 《加茂》(二十七) 《難波》(二十八) 《放生川》(二十九) 《嵐山》(三十) 《養老》(三十一) 《籠》(三十二) 《頼政》(三十三) 《通盛》(三十四) 《朝長》(三十五) 《敦盛》(三十六) 《井筒》(三十七) 《江口》(三十八) 《采女》(三十九) 《夕顔》(四十) 《半菰》(四十二) 《芦刈》(四十二) 《藤戸》(四十三) 《籠太鼓》(四十四) 《烏頭》(四十五) 《阿漕》(四十六) 《鶴》(四十七) 《鍾馗》(四十八) 《鶺鴒》(四十九) 《舍利》(五十) 《項羽》(五十一) 《熊坂》(五十二) 《三輪》(五十三) 《龍田》(五十四) 《誓願寺》(五十五) 《遊行柳》(五十六) 《放下僧》(五十七) 《松虫》(五十八) 《天鼓》(五十九) 《梅枝》(六十) 《野守》(六十一) 《殺生石》(六十二) 《呉服》(六十三) 《志賀》(六十四) 《右近》(六十五) 《巴》(六十六) 《碇潜》(六十七) 《知章》(六十八) 《仏原》(六十九) 《西行桜》(七十) 《小塩》(七十一) 《雲林院》(七十二) 《六浦》(七十三) 《浮舟》(七十四) 《玉葛》(七十五) 《錦木》(七十六) 《葛城》(七十七) 《女郎花》(七十八) 《安宅》(七十九) 《山姥》(八十) 《舟橋》(八十一) 《当麻》(八十二) 《唐船》

(八十三) 《小蝶》(八十四) 《藤》(八十五) 《現在七面》(八十六) 《大瓶狸々》

ワキ方と間狂言との応答の詞章を記した伝書は、基本的な能のワキを勤める人が手控えとして持つていけばよいもので、ワキツレや謡のみを習っている人には不要である。このため残存数が少なく、高安流西村家のもものはこれまで学会に報告されていない。内容的には明和年間に遡る可能性も強く貴重な資料であると考えられるので、ここに報告させて頂いた。また、御許可頂ければ紀要等に翻刻させて頂きたいと考えている。

補記 貴重な『高安流狂言応答』の閲覧・調査を許可いただきました和泉流狂言方佐藤友彦師に心より感謝申し上げます。本稿は平成二十二年科学費研究費基盤研究(〇)「東海地域における地域密着型の能楽興行に関する研究」(研究代表者 米田真理 研究課題番号: 22520206)による成果の一部となります。

〔資料紹介〕
筧一文献蔵

『岡村保道能楽資料』

岡本保道は、三重県の田丸町(現在の玉城町)に活動基盤を置き、大田崎 未知

正から昭和にかけて活躍した喜多流シテ方の能楽師である。保道が遺した一群の能楽資料がある。現在これらの資料は、大倉流大鼓方の寛鋳一氏が蔵している。今回はこの資料から、特徴的なものを三点紹介したい。この資料紹介を機会として、これらを「寛鋳一文庫蔵『岡村保道能楽資料』」と命名したい。

「喜多宗家來信書綴」は縦が二三ミリ、横が一五八ミリの縦本で、厚紙表紙の簡易製本である。厚紙表紙には墨書で「喜多宗家來信書綴正教授岡村保道」と記されており、昭和二十五年から昭和五十二年まで喜多宗家から送られてきた通知文、その内容には入門免許料内規、免状規定、免状料内規、稽古順、高林吟二氏破門通知ハガキ等を収め、一冊にまとめてある。戦後の喜多流を研究する上で、非常に貴重な資料である。

「勸進帳」は縦が二三八ミリ、横が一五八ミリ、厚紙表紙の大和綴じ縦本である。喜多流能楽堂再建趣意書、喜多能楽堂再建設計圖、寄付申込書、賛同寄付申込者二十七名、うち六名分がミセケチであるが、住所氏名や寄付金額等を一冊にまとめている。昭和二十年に戦災で焼失した喜多舞台再建のため、昭和二十五年に「喜多流能楽堂再建後援會」が立ち上げられた。喜多舞台再建のため、

どのような手段が取られたのかを知る好資料である。

「No.4記録 後藤先生稽古会(仮称)三重霞会」はA5判ノートに、喜多流シテ方の後藤得三による稽古の内容や収支報告がまとめられている。後藤得三は十四世喜多六平太の高弟で、保道の師匠でもある。後藤が二ヶ月に一回の割合で三重を訪れ、二日にわたり稽古をつけていたことが記されている。また保道が主宰した会の番組には、後藤をはじめ、謡の名手として名高い福岡周齋の名が見られる。十四世喜多六平太は、喜多流の再興と喜多舞台再建のため、支部組織の確立を図ったと言われる。宗家につながる支部組織の活動を裏付ける、非常に貴重な資料である。

「寛鋳一文庫蔵『岡村保道能楽資料』」は、戦後の喜多流の流れを歴史的に知る上で重要な資料である。この資料を精査し、戦後の喜多流史を読み解いていきたい。

(注) 喜多舞台は、明治二十六年に東京飯田町(現在の飯田橋)に創立されたが、大正十二年の関東大震災で焼失した。昭和二年に東京四谷に再建されたが、昭和二十年の戦災で再び焼失した。この勸進は、昭和三十年に東京目黒で再建された喜多能楽堂のためのものである。

平成22年度例会記録

平成22年4月25日 米野コミュニティセンター
発表 ①「和谷の問題点」

寛 鋳一氏

②「明治維新以降の伊勢・鳥羽の能楽―一色町を中心に―」
飯塚恵理人氏

平成22年6月6日 米野コミュニティセンター
発表 「白山山麓の能面」

曾我 孝司氏

平成22年8月15日

第一部 「装束虫干し拝観」 豊橋市 安海熊野神社
第二部 「研究発表」 豊橋カリオンビル四階中会議室

①「魚町の能面」 保田 紹雲氏

②「魚町狂言伝書の性格」

雲形本研究会(林和利氏・佐藤友彦氏・野崎典子氏・安田徳子氏・小谷成子氏・米田真理氏・田崎未知氏)

平成22年11月14日 米野コミュニティセンター

発表 ①「魚町の能面」(再) 保田紹雲氏

②「魚町狂言伝書の性格」(再)

雲形本研究会(林和利氏・佐藤友彦氏・野崎典子氏・安田徳子氏・小谷成子氏・米田真理氏・田崎未知氏)

平成23年2月6日 米野コミュニティセンター

発表 「観世大夫元章創案の小書とその変遷」

橋場 夕佳氏

訃報

小島廣次氏 平成二十二年十二月二十二日没。享年八十六歳。
墓所は津島市片町浄光寺。

東海能楽研究会年報 第十五号

二〇二一年(平成二十三) 三月三十一日発行

代表者 林 和利

名古屋女子大学文学部 林研究室

〒468-8507 名古屋市中白区高宮町一三〇二

印刷者 共生印刷株